日本のオペラ公演2013
──公演データの分析とその考察──

『日本のオペラ年鑑』編纂委員会・石 田 麻 子

1. はじめに【表1】

1995年版の発行開始から、この「日本のオペラ年鑑2013」で19年目を迎えた。その間に起こった様々な政治、経済、社会現象の渦の只中にあって、オペラ公演が様々な影響を受けていることを毎年のように感じる。公演データの分析作業において、それらの現象からの影響を明確に感じる場合もあれば、じわじわと忍び寄ってきているという感触の場合もある。新国立劇場をはじめとする大規模な多面舞台劇場が各地に開場したこと、周年事業などを機に創作オペラが次々と作り出されてきていること、様々な形態で招聘オペラ公演が盛んに行われてきたのが東日本大震災の影響を直接受けたことなど、大きな傾向や大きな事件もあれば、トリノ・オリンピックでオペラ・アリアが取り上げられたことで《トゥーランドット》上演が一気にブームになったなどのトピックもあった。こうした大小様々な事象は枚挙にいとまがない。2013年にはどんな現象が現れているのか、この稿では毎年同様の分析手法をとりつつ、考えてみたい。

今回も、全てのオペラ公演を、756席以上の大規模会場をA表に、756席未満の中・小規模会場をB表に、それぞれ区分して分析している。これは、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスの客席数である756席を区切りとして、大規模会場と中・小規模会場とに分類したものである。オペラ劇場としての機能を備えた同ホールは、一定規模の公演を実施するために必要な条件を備えていると考えられることから、編纂委員会での検討のうえ、比較的大型の公演とそれ以外のものとを便宜的に分類するために設けた基準である。学校の体育館での公演など、オペラ公演や演奏会を行うことを目的としない会場での公演については、規模にかかわらず中・小規模公演に分類している。また、演奏会形式・ハイライト公演といった本来の上演形式とは異なる公演形態のものをC表として、巻末の資料編に掲載しているのは例年どおりである。また、今年はC表公演に関する若干の分析を「6. 演奏会形式など」の項で行った。

さらに、オペラ団体のみならず、劇場等による公演、大学等の教育機関の学生等が自主的に行う公演、団体や劇場間の共同制作公演等は「国内団体公演」に、大学主催の教育研究発表を目的とした公演、団体付属や劇場付属研修所等の発表公演等は「教育研究団体公演」に、海外の歌劇場や音楽祭等の来日公演は「海外団体公演」に分類している。「国内団体」の研修所公演は「教育研究団体」としており、たとえば新国立劇場公演は「国内団体」に、新国立劇場オペラ研修所公演は「教育研究団体」にそれぞれ分類してある。ま

表1　分析対象と上演団体の区分（○は本稿での分析対象、×は対象とせず、巻末に公演表を掲載）

	1. 国内団体	2.教育研究団体	3. 海外団体
A表：大規模会場公演　　＝756席以上の客席数	○	○	○
B表：中・小規模会場公演＝756席未満の客席数	○	○	○
C表：演奏会形式等	分析記事のみ（6. 演奏会形式など）		

た、団体が他団体と共同制作などを実施した場合は、その団体が単体で実施した場合とは区別し、別団体とした。例えば（公財）びわ湖ホールは1団体として、（公財）びわ湖ホールが神奈川県民ホール、京都市交響楽団等と共同制作した場合は、もう一つ別の1団体として、さらに（公財）びわ湖ホールが神奈川県民ホールと日本センチュリー交響楽団等と共同制作した場合は、もう一つ別の1団体として数えている。（この方法は、2012年版から特に厳格に行っている。）

2. 日本のオペラ公演2013年

2-1. 総上演回数と活動団体数の推移【図1、表2、図2】

2013年は、A表とB表をあわせた総上演回数が1,139回と、2012年の1,117回より若干増加した。上演活動を行った団体数は312団体となり、2011年の218団体、2012年の277団体から、一層増える傾向にある。大規模会場での公演は2011年の434回から2012年は490回へと増え、2013年も493回で増加し、中・小規模会場での公演は2011年の469回から2012年に627回へ、さらに2013年は646回に増えた。

国内団体に関しては、2011年には189団

図1　総上演回数と活動団体数の推移

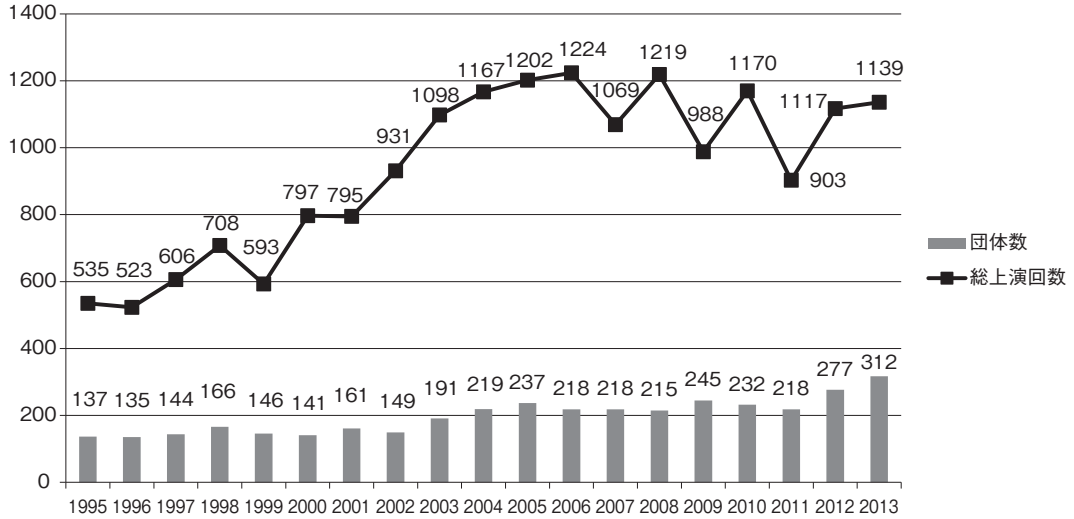


表2　2013年のカテゴリー別オペラ上演団体活動状況一覧

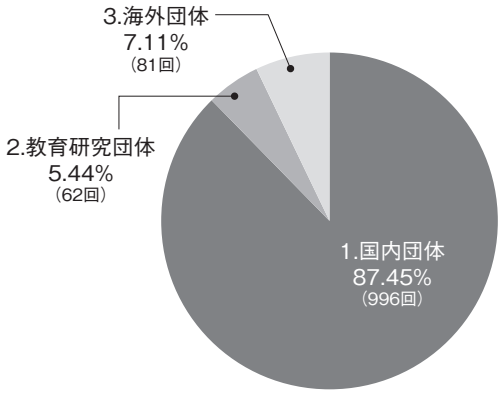
A．大規模会場（756席以上）		
カテゴリー	団体数	総上演回数
1.国内団体	123	379
2.教育研究団体	14	33
3.海外団体	9	81
合計／総団体数・総上演回数	146	493/1139

B．中・小規模会場（756席未満）		
カテゴリー	団体数	総上演回数
1.国内団体	172	617
2.教育研究団体	16	29
3.海外団体	0	0
合計／総団体数・総上演回数	188	646/1139

合計（A＋B）		
カテゴリー	団体数＊	総上演回数
1.国内団体	274	996
2.教育研究団体	29	62
3.海外団体	9	81
合計	312	1139

＊団体数の合計は、A表とB表をあわせて再度集計したもの。同一の団体が規模の異なる会場で公演した場合もあるため、A表とB表を合計した数よりも少なくなる。

図2　各カテゴリーの総上演回数が全体に占める割合



体による773回だったのが、2012年は249団体による978回、2013年は274団体996回となった。オペラ公演を実施する団体が新たに増えていることを今回のデータ分析作業の過程で実感した。歌手たちが集まり、自力で公演するケースなどが増加していることが原因と考えられ、それらの公演規模は、客席数や回数、さらにピアノ伴奏だったりする等の点で比較的小規模である。これらの公演と、劇場やオペラ団体等が実施する大規模な公演との差異が明確になってきたようだ。

教育研究団体は、2011年は22団体による56回、2012年は23団体による61回、さらに2013年は29団体による62回となった。教育研究団体は大学、劇場や団体の研修所などで、団体数が急激に増減することは考えにくく、ほぼ同様の数字が続いていくと予測される。

海外団体は、2011年は7団体の74回、2012年は5団体による78回、2013年は9団体で81回。2010年が10団体で126回公演だったから、来日する海外劇場等の数は大分回復したものの、公演回数は2011年に減少してから数字はほとんど変わらず、微増という結果になった。

2-2. 国内団体公演【表3、表4-1、表4-2】

表3は、大規模会場で8回以上の公演を実施した国内団体についてまとめたものである。

東京二期会は、前年に引き続き外部組織との協働を通じて大規模な公演を実施したことが目立ち、2013年の総上演回数は23回となった。まず、文化庁の「平成24年度優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業（共同制作公演）」助成を受けて、びわ湖ホール・神奈川県民ホール・東京二期会・京都市交響楽団・神奈川フィルハーモニー管弦楽団による《椿姫》が上演された。また年度が替わってからは文化庁の補助事業名も変更となり、「平成25年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業」として、《ワルキューレ》が、びわ湖ホール・神奈川県民ホール・東京二期会・日本センチュリー交響楽団・神奈川フィルハーモニー管弦楽団との共同制作で行われた。いずれの演目も、びわ湖ホールと神奈川県民ホールを会場に、各2回、計4回ずつ上演されている。滋賀県と神奈川県という離れた地域での公演となるため観客が重ならないこと、1つのプロダクションの上演回数を増やせることなど、協働の目的が明確であることが作用していて、さらに2つのホールともに県立であり規模が似ていることもあって、長く続いている劇場間共同制作事業である。

東京二期会が日生劇場と共同で続けている公演事業は、2013年はアリベルト・ライマン作曲《リア》を3回。前年の《メデア》と同様、ライマン作品の日本初演となった。2012年に引き続いて作曲家自身が来日して講演会を行うなど、着実な話題づくりを行ったこともあって前評判が高かった。この公演は、同劇場の開場50周年記念と読売日本交響楽団50周年記念、東京二期会の60周年の記念行事として行われた。こうした劇場同士等の共同制作公演における、東京二期会の「歌手の

供給源」としての役割は見逃せない。このほかに主催公演として《こうもり》《マクベス》《ホフマン物語》を4回ずつ公演している。これらの公演の課題として、引き続き観客の入場率を上げる努力が求められている。

（公財）日本オペラ振興会には、藤原歌劇団と日本オペラ協会との2つのオペラ団体がある。そのうち、日本オペラ協会は、「平成24年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ　金沢歌劇座開館50周年記念公演」

表3　2013年の国内団体公演活動データ*1

団体名	上演作品	大規模会場		中・小規模会場		合計
		上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
オペラシアターこんにゃく座	アルレッキーノ	0	69	5	173	242
	シグナルとシグナレス	0		7		
	ねこのくにのおきゃくさま	5		13		
	ネズミの涙	36		6		
	ピノッキオ	11		64		
	よだかの星	1		21		
	夏の夜の夢～嗚呼！大正浪漫編～	6		0		
	銀のロバ	0		8		
	森は生きている	10		49		
東京二期会	こうもり	4	23	0	0	23
	椿姫*2	4				
	マクベス	4				
	ホフマン物語	4				
	ワルキューレ*2	4				
	リア*3	3				
びわ湖ホール	泣いた赤鬼	5	15	3	5	20
	椿姫*2	4		0		
	三文オペラ	2		0		
	ワルキューレ*2	4		0		
	清姫―水の鱗	0		1		
	魔笛	0		1		
神奈川県民ホール*4	椿姫*2	4	10	0	0	10
	ワルキューレ*2	4				
KAAT（神奈川芸術劇場）	カーリュー・リヴァー	2				
兵庫県立芸術文化センター	セビリャの理髪師	10	10	0	0	10
藤原歌劇団*5	仮面舞踏会	2	6	0	0	9
	カルメン	1				
	La Traviata	3				
日本オペラ協会	天守物語	3	3			
日生劇場（(公財)ニッセイ文化振興財団）	リア*3	3	8	0	0	8
	フィデリオ	5				
サイトウ・キネン・フェスティバル松本実行委員会	こどもと魔法	4	8	0	0	8
	スペインの時	4				
上位8団体合計上演回数／総上演回数	—	—	152/493*6	—	178/646	330/1139

＊1　大規模会場で8回以上の上演をしている団体。大規模会場での総上演回数の合計順。共催公演を含む。
＊2　《椿姫》《ワルキューレ》各4回は、（公財）びわ湖ホール/神奈川県民ホール/（公財）東京二期会他の共催・制作（自会場以外での上演回数も記載している）。
＊3　《リア》3回は、（公財）ニッセイ文化振興財団と（公財）東京二期会ほかの共催（同公演も、各組織の上演回数に重ねて記載している）。
＊4　神奈川県民ホールとKAATは、神奈川芸術文化財団の指定管理下で運営されている会場。そのため、1団体として数えた。
＊5　藤原歌劇団と日本オペラ協会は、日本オペラ振興会として、同一組織にあるオペラ団体。そのため、1団体として数えた。
＊6　上記のとおり、本表には、複数団体の共同制作事業が、関係した団体すべての項目に重複して掲載されている。したがって、合計152回とあるのは、実数は合計143回である。

として1回、「2013年都民芸術フェスティバル参加公演」として2回の合計3回、水野修孝作曲の《天守物語》公演を実施した。さらに藤原歌劇団は、《仮面舞踏会》を2回、長いキャリアを誇るマリエッラ・デヴィーア等の出演で《La Traviata》を3回、「川崎・しんゆり芸術祭2013オープニング公演」として《カルメン》を1回上演し、合計で9回となった。

びわ湖ホールは、先の東京二期会で挙げた共同制作による《椿姫》および《ワルキューレ》公演を、同ホールでは2回ずつ行った（表3では、神奈川県民ホールでの公演も含め、4回ずつとしている）。その他に、子ども向けオペラとして、松井和彦作曲の《泣いた赤鬼》を、ホール以外の複数の会場で上演した。これらは県内各地の教育委員会との共催による公演であり、滋賀県立の劇場として県内における同ホールが果たす役割を拡大している。栗山昌良演出の《三文オペラ》は、前年のびわ湖ホールで主催公演したプロダクション。これを、「平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」の補助を受け、「平成25年度新国立劇場地域招聘オペラ公演」として、新国立劇場運営財団との共催により新国立劇場中劇場で2回公演した。このように、同ホールは例年と変わらず活発な公演活動を行っていて、我が国におけるオペラ制作の拠点の1つとなっている。

兵庫県立芸術文化センターは、「平成25年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業」により、「佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2013」と銘打って、《セビリャの理髪師》を10回上演したが、1つの演目の上演回数としては新国立劇場をも上回る（他に演奏会形式で2回）。

このほか表3には含まれないが、関西二期会は《愛の妙薬》を大阪国際交流センター大ホールで2回、「平成25年度文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）」の支援を受けて実施した《夢遊病の女》を吹田市文化会館メイシアター大ホールで2回、さらに同補助金により《魔笛》を尼崎市総合文化センター あましんアルカイックホールで2回、それぞれ上演した。大阪府や兵庫県のホールが会場となっているが、このように公演ごとに会場を変えなければならないのは、各団体にとって大変な苦労であることには違いないだろう。これは、東京地域の複数の団体も同様である。

堺シティオペラによる《ロメオとジュリエット》の2回公演は、他団体同様に、（独）日本芸術文化振興会による「平成25年度文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）」を受けてのもの。地域で活動する若手歌手などを起用し、演出の粟國淳が手堅くまとめた。関西では、さらに関西歌劇団などの各団体のほか、河内長野市や伊丹市、川西市などのいくつかの財団が毎年主催公演を行っており、びわ湖ホールや兵庫県立芸術文化センターなど大規模な劇場が関西のオペラ上演を牽引するのに加え、地域における着実な公演活動を支える力強い役割を担っている。

オペラシアターこんにゃく座は、東日本大震災の影響を受けた団体の1つである。2010年の256回が、震災のあった2011年には222回と少し落ち込んだ。それが2012年は242回に数字を戻しており、2013年も242回と、前年と同数となった。

表4-1、4-2では、新国立劇場が自らの会場で実施した公演、さらに劇場外公演について取り上げている。

新国立劇場の主催公演のうち、新制作は3つのプロダクション。5～6月に《ナブッコ》を新制作して6回上演、6月に香月修に新作委嘱した作品《夜叉ヶ池》を5回、2013/2014シーズンのオープニングとして、10月に《リゴレット》を7回上演した。そ

表4-1　2013年新国立劇場主催のオペラ公演（新国立劇場オペラパレスおよび中劇場：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
1～2月	タンホイザーと ヴァルトブルクの歌合戦	R.ワーグナー	5	新国立劇場開場15周年 2012/2013 SEASON 《タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦》	全3幕/字幕付原語上演
1～2月	愛の妙薬	G.ドニゼッティ	5	新国立劇場開場15周年 2012/2013 SEASON 《愛の妙薬》	全2幕/字幕付原語上演
3月	アイーダ	G.ヴェルディ	7	新国立劇場開場15周年 記念公演 2012/2013 SEASON《アイーダ》	全4幕/字幕付原語上演
4月	魔笛	W.A.モーツァルト	4	新国立劇場開場15周年 2012/2013 SEASON 《魔笛》	全2幕/字幕付原語上演
5～6月	ナブッコ	G.ヴェルディ	6	新国立劇場開場15周年 2012/2013 SEASON 《ナブッコ》	新制作/全4幕/字幕付原語上演
6月	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	5	新国立劇場開場15周年 2012/2013 SEASON 《コジ・ファン・トゥッテ》	全2幕/字幕付原語上演
6月	夜叉ヶ池	香月修	5	新国立劇場開場15周年 2012/2013 SEASON 《夜叉ヶ池》	委嘱初演/新制作/全2幕/字幕付日本語上演 新国立劇場中劇場（プレイハウス）
7月	愛の妙薬	G.ドニゼッティ	6	平成25年度 新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室	全2幕/字幕付原語上演・普及公演事業
7月	三文オペラ	K.ワイル	2	平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ 平成25年度新国立劇場地域招聘オペラ公演　びわ湖ホール	全幕/字幕付日本語上演 新国立劇場中劇場（プレイハウス）
10月	リゴレット	G.ヴェルディ	7	平成25年度（第68回） 文化庁芸術祭主催公演 2013/2014シーズンオープニング公演 2013/2014 SEASON《リゴレット》	新制作/全3幕/字幕付原語上演
10月	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	4	平成25年度（第68回） 文化庁芸術祭協賛公演 2013/2014 SEASON 《フィガロの結婚》	全4幕/字幕付原語上演
11～12月	ホフマン物語	J.オッフェンバック	5	2013/2014 SEASON 《ホフマン物語》	全5幕/字幕付原語上演
—	11作品	7人	61/493	—	—

表4-2　2013年新国立劇場主催のオペラ公演（他会場での公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
10月	夕鶴	團　伊玖磨	2	平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ 平成25年度 新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演	主催：尼崎市/（公財）尼崎市総合文化センター/新国立劇場 会場：あましんアルカイックホール　普及公演事業
—	1作品	1人	2/493	—	—

の他の再演舞台も4～7回の上演回数となっている。なかでもフランコ・ゼッフィレッリ演出による《アイーダ》が7回上演されたのが、満員の観客を集めて人気となった。

新国立劇場が劇場外公演として実施した兵庫県尼崎市での《夕鶴》は2回公演。これは、「平成25年度文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」の助成を得て、「高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演」として、あましんアルカイックホールで行われたものである。こうした公演の意義は大きく、回数や場所の拡大などが期待される。

2-3. オペラ公演への助成制度

前項のとおり、国内オペラ団体等による公演では、複数の助成制度が活用されている。以下、2013（平成25）年に国が実施した助成の中で、特にオペラ公演に関係するものを整理した。

各地のオペラ団体が主催、実施している団体型オペラ制作への補助金には「文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）」がある。これは文化庁の補助金を、（独）日本芸術文化振興会を通じ、我が国の舞台芸術の水準を向上させる牽引力となっている芸術団体が行う舞台芸術の創造事業に対して助成するものである。これにより、主として大規模なオペラ公演事業やオーケストラの定期公演等に対して助成が行われたのは、前年度同様である。オペラ団体では、（公財）東京二期会や（公財）日本オペラ振興会、（公社）関西二期会、堺シティオペラ（一社）、（有）オペラシアターこんにゃく座、東京オペラ・プロデュースが、各主催公演事業に対して同助成を受けている。この他、（独）日本芸術文化振興会の芸術文化振興基金による助成には、「現代舞台芸術創造普及活動（音楽）」があり、NPO法人関西芸術振興会（関西歌劇団）の《仮面舞踏会》など、地域のオペラ公演活動の核となっている組織の活動が助成を受けた。この他、あいちトリエンナーレ2013プロデュースオペラ《蝶々夫人》、藤沢市民オペラの創立40周年記念《フィガロの結婚》などの記念事業が採択されていることも特徴である。さらに、各地域で活動するオペラ団体の中には、同振興会の同じ基金のうち「アマチュア等の文化団体活動」枠での助成を受けている場合もある。三重オペラ協会の《いのち》、三河市民オペラ制作委員会による《トゥーランドット》などがその例である。この他に、学校等への巡回公演として、文化庁が「次代を担う子どもの文化芸術体験事業（巡回公演事業）」（平成25年度まで）を実施しており（同事業では、アーティストの派遣事業なども実施）、各団体はこの枠での助成を受けて各地域での学校公演等を行っている。

各地のホール等が主催して実施された劇場型オペラ制作には、平成24年度までは文化庁の「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」で、劇場間共同制作公演等も含む大規模な助成が行われてきた。平成25年度からは新たに同じく文化庁の「劇場・音楽堂等活性化事業」が開始され、平成24年度までの事業助成が受け継がれた。この中で、ひろしまオペラルネッサンス公演《イル・カンピエッロ》が行われた。この他、新国立劇場の「高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演」での《夕鶴》公演は、文化庁「地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」の枠で助成が行われたものである。

また、（独）日本芸術文化振興会の芸術文化振興基金による助成には、「地域文化施設公演・展示活動：文化会館公演活動」があり、四日市市文化会館での《椿姫》や川西市みつなかホールの《カプレーティとモンテッキ》など、各地域の文化施設等を運営する組織主催の、オペラ公演をはじめとする活動に対し

て助成が行われている。

これら国からの助成金以外に、地方自治体、さらに民間財団等からの助成なども活用されている。こうした補助金は各公演の赤字を補てんする重要な役割であり、補助金事業の動向は各主催者にとっても大きな関心事となっている。

2-4. 教育研究団体公演【表5】

教育研究団体の公演は、2013年は62回と、2012年の61回からわずかに増加した。各音楽大学の大学オペラ公演、劇場や団体が運営する研修所などが、多様な公演を定期的に行っている状況は変わらない。

こうした教育研究団体による上演回数は比較的安定しているのだが、平成25年度に開始された文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」による補助事業はいくつかの大学オペラ公演にも活用されている。東京藝術大学が《秘密の結婚》を4回上演したのは、これまで同様に同大学内奏楽堂で行われた上演2回に加えて、新国立劇場で2回公演を実施したことによる。昭和音楽大学《オベルト サン・ボニファーチョ伯爵》は学内テアトロ・ジーリオ・ショウワで2回、北海道教育大学岩見沢校は札幌市教育文化会館小ホールで《バティスアンとバティスエンヌ》を1回上演しており、これらも同助成を受けている。

教育研究団体公演で取り上げられる作品は、学生や卒業生など若い歌手たちが出演することもあって、モーツァルト、ドニゼッティなどの作品を上演する傾向が強く、歌手のアンサンブル力を高める方向となっている。

2-5. 海外団体公演【表6、図3】

海外団体公演は、2010年に126回行われていたのが、2011年の東日本大震災の影響を受けた結果、73回へと激減、2012年は78回、2013年も81回と、上演回数の点では減少したまま横ばいとなっている。

2013年に行われた9団体の公演のうち、フェニーチェ歌劇場、バーゼル歌劇場、ミラノ・スカラ座、トリノ王立歌劇場の4団体が

表5　2013年の教育研究団体公演活動データ*

団体名	作品名	作曲家名	大規模会場		中・小規模会場		合計
			上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
洗足学園大学	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	2	2	0	0	6
	ベロ出しチョンマ	三木稔	0	0	1	1	
	鶴	三木稔	0	0	1	1	
	秘密の結婚	D.チマローザ	1	1	0	0	
	電話～愛の三角関係～	G.C.メノッティ	0	0	1	1	
大阪音楽大学	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	2	5	0	0	5
	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	1				
	夕鶴	團伊玖磨	2				
東京藝術大学	秘密の結婚	D.チマローザ	4	4	0	0	4
国立音楽大学	ノイローゼ患者の一夜	N.ロータ	1	4	0	0	4
	内気な二人	N.ロータ	1				
	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	2				
焼津中央高等学校合唱部	魔笛	W.A.モーツァルト	4	4	0	0	4
新国立劇場オペラ研修所	カルディヤック	P.ヒンデミット	3	3	0	0	3
6団体合計上演回数/総上演回数	12作品	8人	—	23/493	—	3/646	26/1139

＊大規模会場で、教育研究型公演の開催実績が3回以上ある団体。大規模会場での総上演回数順、合計および50音順の掲載。学生主催公演など有志による公演などは含めない。

24回の「拠点型」公演（4都市以下での公演）を、プラハ国立劇場、ハンガリー国立歌劇場、プラハ国立歌劇場の3団体が50回の「巡回型」公演（5都市以上での公演）を、それぞれ実施した。2012年は「拠点型」が2団体で20回、「巡回型」が3団体で58回だったから、「拠点型」「巡回型」ともにほぼ横ばいだと考えてよい。

イタリアのフェニーチェ歌劇場、ミラノ・スカラ座、トリノ王立歌劇場の3劇場が、来日、2013年はヴェルディ・イヤーだったこともあって、それぞれ《オテロ》《リゴレット》《ファルスタッフ》《仮面舞踏会》のヴェルディ作品を中心とした大型公演を行ったのが2013年の特徴である。

「巡回型」の公演形態をとるプラハ国立劇場とプラハ国立歌劇場はモーツァルト作品でそれぞれ16回と18回公演を行い、ハンガリー国立歌劇場がヴェルディ作品で16回、公演実施した。19の都府県で行われた海外団体による「巡回型」公演は、日本の各団体や教育団体等の公演に加えて、各地域に広くオペラ鑑賞機会を提供しているものの、この形態による公演は50回で、2010年の101回から半減したままである。

この他、南アフリカのイサンゴ・アンサンブルによる《プッチーニのラ・ボエーム

図3　2013年海外団体の公演（全81回）・所属国別割合

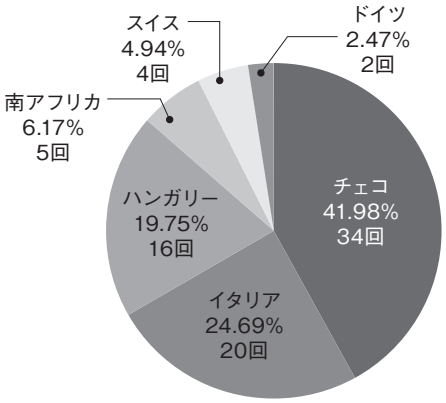


表6　2013年海外団体の公演活動データ（大規模会場*）

上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	開催地（都道府県数）
1月	チェコ	プラハ国立劇場	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	16	16	10
4月	イタリア	フェニーチェ歌劇場	オテロ	G.ヴェルディ	4	4	3
6月	スイス	バーゼル歌劇場	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	4	4	4
6月	ドイツ	人形劇団タリアス・コンパニョンス	魔笛	W.A.モーツァルト/マルクス・マリア・ライセンベルガー	2	2	1
6～7月	ハンガリー	ハンガリー国立歌劇場	椿姫	G.ヴェルディ	16	16	11
9月	イタリア	ミラノ・スカラ座	ファルスタッフ	G.ヴェルディ	5	9	1
			リゴレット	G.ヴェルディ	4		1
10月	チェコ	プラハ国立歌劇場	魔笛	W.A.モーツァルト	18	18	13
11～12月	イタリア	トリノ王立歌劇場	トスカ	G.プッチーニ	4	7	1
			仮面舞踏会	G.ヴェルディ	3		1
12月	南アフリカ	イサンゴ・アンサンブル	プッチーニのラ・ボエーム／Abanaxhi	G.プッチーニ/マンディシ・ディヤンティス/ポーリーン・マレファネ	5	5	1
—	6ヶ国	9団体	9作品	3(6)人	81	81/493	20都府県

＊劇場名は、主催者表記に準じる。2013年は、中・小規模会場での海外団体の公演は行われなかった。

／Abanaxhi》はアフリカの伝統音楽などをミックスした上演。さらに、ドイツのタリアス・コンパニョンスによる人形劇《魔笛》などもあり、オペラの可能性を広げる公演が行われた。

3. 指揮者と演出家

（指揮者）

2013年に登場した指揮者は、日本190人、外国人38人となった。2012年の日本人174人に比べると大きく増加しており、外国人は2012年が31人だったので、これも増加した。

日本人のうち、大規模会場での公演活動を中心に行った指揮者は、以下のとおりである。井村誠貴が、河内長野市立文化会館（ラブリーホール）での《カヴァレリア・ルスティカーナ》《ジャンニ・スキッキ》2作品を1回公演ずつ、喜歌劇楽友協会の《メリー・ウィドゥ》3回の他、中・小会場での上演も含めて12回、牧村邦彦が川西市みつなかホール《カプレーティとモンテッキ》や大阪音楽大学100周年記念事業の《夕鶴》等で11回となった。

さらに、佐渡裕が兵庫県立芸術文化センター《セビリャの理髪師》10回、沼尻竜典が、びわ湖ホールと神奈川県民ホール他による共同制作公演《椿姫》と《ワルキューレ》の公演で8回、園田隆一郎が、びわ湖ホール《三文オペラ》、藤原歌劇団《La Traviata》、名古屋二期会の《セヴィリアの理髪師》公演で7回となった。

中・小規模公演にも範囲を広げると、アーツ・カンパニーの活動で佐々木克仁が30回、名古屋二期会の巡回公演で鈴木俊也が16回と登場回数が多くなった。

外国人のうち、「拠点型」公演およびその他特徴のある公演の指揮者では、ジャンナンドレア・ノセダがトリノ王立歌劇場の日本公演《トスカ》《仮面舞踏会》を計7回指揮したことが目立つ。これ以外には、新国立劇場の《リゴレット》7回公演をピエトロ・リッツォが、ミヒャエル・ギュットラーが同じく新国立劇場の《アイーダ》7回を指揮している。また、チョン・ミョンフンはフェニーチェ歌劇場の来日公演《オテロ》上演を4回振ったのに加えて、演奏会形式（抜粋）で同歌劇場の《椿姫》《リゴレット》を2回ずつ合計4回、東京フィルハーモニー交響楽団の《トリスタンとイゾルデ》を3回振っているので、総計11回、オペラを指揮したことになる。

このほか、「巡回型」公演では、プラハ国立劇場の公演でヤン・ハルペツキーが16回、プラハ国立歌劇場の合計18回をリハルド・ハインとズビネク・ミューレルが分担し、ハンガリー国立歌劇場でヤーノシュ・コヴァーチュとドモンコシュ・ヘヤが合計16回振っている。

（演出家）

演出家は日本人182人、外国人は32人（再演演出除く）の名前が挙がった。この数字にはいずれも、共同演出をした者を含めており、再演演出家は含めていない。日本人は2012年の175人からの増加となり、外国人も同年の29人から増加した。

日本人演出家では、大規模公演を中心とした公演を演出した者の中では、岩田達宗の36回が他を圧倒している。このうち、26回が大規模会場で、10回は中・小規模の会場での公演となった。岩田の場合は日本のオペラ作品演出が多いことが特徴の1つである。新国立劇場の委嘱初演作《夜叉ヶ池》、日本オペラ協会の《天守物語》、（公財）仙台市市民文化事業団の《遠い帆》の他、びわ湖ホールの《泣いた赤鬼》などの演出を手掛けている。さらに、藤原歌劇団の《La Traviata》の他、藤沢市民オペラ（（公財）藤沢市みらい創造財団）、河内長野マイタウン・オペラ（（公財）河内長野市文化振興財団）など、各地域

での演出も目立つ。

次に、中村敬一が20回で続く。2013年の中村の演出機会は、地域のオペラ団体を中心とする団体型公演と教育研究型公演とに分けられる。すなわち、名古屋二期会の《セヴィリアの理髪師》静岡国際オペラコンクールでの《夕鶴》、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスの《ピーター・グライムズ》等の団体型、さらに国立音楽大学の《コジ・ファン・トゥッテ》、大阪音楽大学の《フィガロの結婚》等、教育研究型での演出などである。

飯塚励生の19回は、演技指導も含めると20回となる。主な演出舞台は、兵庫県立芸術文化センター《セビリャの理髪師》や愛知県立芸術大学の《こどもと魔法》などである。続いて、馬場紀雄と松本重孝の16回が続く。馬場は、長崎県オペラ協会、群馬オペラ協会、熊本シティ・オペラ協会、三重オペラ協会、沖縄オペラ協会と、文字通り各地域での大規模公演の演出を行ったことで回数を重ねた。松本は、大規模会場では、東京藝術大学の《秘密の結婚》、京都市立芸術大学の《夢遊病の女》などの教育研究型公演がある。さらに粟國淳の12回は、藤原歌劇団と関西歌劇団での《仮面舞踏会》計4回や東京二期会の《ホフマン物語》4回、堺シティオペラ《ロメオとジュリエット》2回と、ひろしまオペラルネッサンスの《イル・カンピエッロ》2回公演の演出を担当したことによる。さらに、三浦安浩の12回は日生劇場の《フィデリオ》などである。この他に、新国立劇場での再演演出も行っている。

この他、「巡回型」公演を中心とした演出で、大石哲史が111回となった。さらに、伊藤多恵が《ピノッキオ》で75回、鄭義信が《ネズミの涙》で42回、山田純彦が共同演出も入れるとアーツ・カンパニーの《カルメン》他で35回となった。

外国人演出家では、新国立劇場による《愛の妙薬》公演でチェーザレ・リエヴィが11回を記録した。さらに、ロラン・ペリーが、サイトウ・キネン・フェスティバルでの《子どもと魔法》《スペインの時》のプロダクションを4回ずつと計算して合計8回となった。この他、アンドレアス・クリーゲンブルクが新国立劇場の《リゴレット》で7回、フランコ・ゼッフィレッリが同じく新国立劇場の《アイーダ》の7回公演で続く。

また、「巡回型」公演を行った中では、プラハ国立歌劇場のラディスラフ・シュトロス演出の《魔笛》が18回、プラハ国立劇場の《フィガロの結婚》でヨゼフ・プルーデクの16回、ハンガリー国立歌劇場の《椿姫》でアンドラーシュ・ベーケーシュの16回などが挙げられる。

4. オペラ作品と作曲家【表7】

2013年は、海外の作品の上演回数が2012年の636回から675回へと増加、日本の作品の上演回数は2012年の481回から464回へと減少した。海外の作品は2012年の97作品から2013年は99作品へ、日本の作品は2012年の75作品から2013年は83作品へと増加している。幅広く多様な作品が取り上げられたことが見て取れる。

4-1. 海外のオペラ作品と作曲家【表8-1、表8-2】

海外の作曲家によるオペラ作品のリストをみると、2013年は、2つのモーツァルト作品《フィガロの結婚》《魔笛》が1位と2位となったことがわかる。2012年に13位だった《カルメン》が4位に戻ってきた。この他、上位15位までに、モーツァルトの《コジ・ファン・トゥッテ》、ヴェルディの《椿姫》《リゴレット》《仮面舞踏会》《アイーダ》、さらにドニゼッティ《愛の妙薬》、プッチーニ《蝶々夫人》《ジャンニ・スキッキ》《トスカ》、J.シュトラウスⅡの《こうもり》、フン

表7　オペラ作品、作曲家別の上演回数

	海外の作品			日本の作品			合計		
	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	総上演回数
2004年	49人	99作品	753回	43人	61作品	414回	92人	160作品	1167回
2005年	57人	111作品	826回	50人	60作品	376回	107人	171作品	1202回
2006年	47人	100作品	800回	50人	71作品	424回	97人	171作品	1224回
2007年	55人	105作品	721回	41(46)人	59作品	352回	96(101)人	164作品	1073回
2008年	50(51)人	107作品	782回	51(52)人	70作品	437回	101(103)人	177作品	1219回
2009年	49(50)人	99作品	653回	48(49)人	48作品	335回	97(99)人	147作品	988回
2010年	42(44)人	86作品	654回	41人	59作品	516回	83(85)人	145作品	1170回
2011年	38人	88作品	530回	34(36)人	51作品	373回	72(74)人	139作品	903回
2012年	51(52)人	97作品	636回	55(56)人	75作品	481回	106(108)人	172作品	1117回
2013年	41(44)人	99作品	675回	54(56)人	83作品	464回	95(100)人	182作品	1139回

＊（　）内は、共作者・編曲者等を入れた場合の数字。

表8-1　2013年に日本で上演された海外のオペラ作品
（大規模会場での上演実績のあるもの、全99作品中・上位16作品、タイトルは便宜的に統一）

No.	作品名	作曲家名	大規模会場	中・小規模会場	合計
1	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	39	18	57
2	魔笛	W.A.モーツァルト	37	17	54
3	椿姫	G.ヴェルディ	36	11	47
4	カルメン	G.ビゼー	9	31	40
5	愛の妙薬	G.ドニゼッティ	18	12	30
6	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	9	17	26
7	こうもり	J.シュトラウスⅡ	9	16	25
8	リゴレット	G.ヴェルディ	11	9	20
9	ヘンゼルとグレーテル	E.フンパーディンク	4	15	19
10	セビリアの理髪師	G.ロッシーニ	12	5	17
11	仮面舞踏会	G.ヴェルディ	12	1	13
11	メリー・ウィドウ	F.レハール	4	9	13
13	蝶々夫人	G.プッチーニ	8	4	12
13	ジャンニ・スキッキ	G.プッチーニ	1	11	12
15	アイーダ	G.ヴェルディ	10	1	11
15	トスカ	G.プッチーニ	4	7	11
合計/総上演回数	—	—	223/493	184/646	407/1139

パーディンクの《ヘンゼルとグレーテル》、ロッシーニの《セビリアの理髪師》など、常連作品が並んでいる。《フィガロの結婚》は、新国立劇場、藤沢市民オペラのほか、プラハ国立劇場が来日時にとりあげたこと等で数字を伸ばしている。また、同じくモーツァルトの《魔笛》は、新国立劇場のほか、プラハ国立歌劇場が公演したことなどが、公演回数が多い理由である。ヴェルディ作品のうち最も公演回数が多かったのは《椿姫》で、これはびわ湖ホールと神奈川県民ホール他の共同制作公演、ハンガリー国立歌劇場の公演等が行われたことも要因となった。

表8-2　2013年に日本で上演された海外の作曲家
（全41人中、上位11人）

No.	作曲家名	上演回数
1	W.A.モーツァルト＊1	149
2	G.ヴェルディ	132
3	G.プッチーニ＊2	58
4	G.ビゼー	40
5	G.ドニゼッティ	35
6	J.シュトラウスⅡ	28
7	J.オッフェンバック	27
8	G.ロッシーニ	24
9	G.C.メノッティ	22
10	E.フンパーディンク	19
11	R.ワーグナー	16
合計/総上演回数	—	550

＊1　モーツァルト作品を基にした作品（タリアス・コンパニョスによる上演）も含む。
＊2　プッチーニ作品を基にした作品（イサンゴ・アンサンブルによる上演）も含む。

2013年はヴェルディ・イヤーであり、さらにワーグナー・イヤーでもあったため、世界中で多くの記念上演が行われたのだが、日本のオペラ公演において、ワーグナー作品が作曲家別作品上演回数で上位に入ることはなく、かろうじて11位となっただけである。とはいえ、ワーグナー作品は、新国立劇場が《タンホイザー》を再演し、びわ湖ホールと神奈川県民ホールの共同制作で《ワルキューレ》が新制作上演されるなど、大型公演が行われている。歌手は、新国立劇場のみならず、びわ湖ホールと神奈川県民ホールの共同制作でも複数の役に一部海外から招聘した人材を起用した。

4-2. 日本のオペラ作品と作曲家【表9-1、表9-2】

日本のオペラ作品の上演回数では、オペラシアターこんにゃく座の取り上げる作品が、上位を占める傾向は例年どおり。その他には、松井和彦作曲の《泣いた赤鬼》公演が、びわ湖ホール他の制作で、大規模会場で7回、中・小規模会場で3回行われた。《夕鶴》は新国立劇場の関西での高校生のためのオペラ鑑賞教室、大阪音楽大学の100周年記念事業等で、大規模会場で7回、中・小規模会場で1回行われた。さらに、中・小規模会場では、「巡回型」公演が中心で、各地域での鑑賞教室が中心となっている。

A表とB表を合わせた作曲家別の上演回数では、萩京子が《ネズミの涙》や《ピノッキオ》など複数の作品で174回（うち3回は林光との共作）と飛び抜けており、林光が《森は生きている》などの作品で114回（うち3回は萩京子との共作）、この他には松井和彦が《金の斧・銀の斧》《羊飼いと娘》等の作品による36回などとなっている。萩京子作品はオペラシアターこんにゃく座が、林光作品はオペラシアターこんにゃく座が中心ではあるが他にも複数のオペラ団体等が取り上げており、さらに松井和彦作品は、びわ湖ホー

表9-1　2013年に国内で上演された日本のオペラ作品（大規模会場）　＊上演回数7回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	ネズミの涙	萩　京子	36	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で6回公演あり
2	ピノッキオ	萩　京子	11	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で66回公演あり
3	森は生きている	林　光	10	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で51回公演あり
4	泣いた赤鬼	松井　和彦	7	3	びわ湖ホール/川崎市民オペラ/ヒロムジカ	中・小規模会場で3回公演あり
4	夕鶴	團　伊玖磨	7	5	新国立劇場/大阪音楽大学/静岡国際オペラコンクール他	中・小規模会場で1回公演あり
合計/総上演回数		—	71/493	—	—	—

表9-2　2013年に国内で上演された日本のオペラ作品（中・小規模会場）　＊上演回数20回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	ピノッキオ	萩　京子	66	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で11回公演あり
2	森は生きている	林　光	51	2	オペラシアターこんにゃく座、静岡室内歌劇場	大規模会場で10回公演あり
3	あまんじゃくとうりこひめ	林　光	26	2	東京合唱協会、港町オペラ座	
4	金剛山のトラたいじ	井上　正志	22	1	オペレッタ劇団ともしび	
5	よだかの星	萩　京子	21	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で1回公演あり
合計/総上演回数		—	186/646	—	—	—

ルや名古屋二期会等の複数の組織等が取り上げていることが特徴となっている。

5. 上演地域の分布と会場別データ【表10、表11、図4、表12-1、表12-2】

上演地域の分布は毎年少しずつ異なっているものの、東京都を中心とした首都圏に偏っている状況は変わらない。特に、公演が開催されなかった県は、2011年は福島県、佐賀県で、2012年は鳥取県だったのが、2013年は福井県と宮崎県で公演開催が確認できなかった。

2013年の上位10位を見ると、首都圏の東京、神奈川が上位を占め、他には愛知、千葉、大阪、兵庫、埼玉、広島が入り、多少の順位の移動はあるものの、ほぼ例年通りの開催状況になった。この他、北海道が8位、宮城が10位に上がっていることが目立つ。

東京は、2011年が373回だったのが2012年には455回へと大幅に増え、2013年は426公演へ減少した。

東京の公演回数の減少は、国内団体による公演数が400回から365回になったこと、また教育研究団体が2012年の27回から2013年の20回へと減少したことによる。一方で、海外団体の上演回数が、2012年は28回だったのが増加して41回になっていることが特徴でもある。

この他に10位以内に入った都府県は、大規模な公演が実施可能である会場があること、音楽大学等の教育機関があること、人口が多く大規模な招聘オペラ公演等を実施しやすいこと、そして多くの大小のオペラ団体が活発な活動を行っていること等が継続的に上位にランクしている理由である。たとえば愛知県では、愛知県立芸術劇場での自主公演や、海外団体による大規模な公演に加えて、地域のオペラ団体による名古屋市内での大小の公演のほか、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋音楽大学のほか、名古屋二期会の研修所などの教育研究機関による公演が毎年行われている。こうした多様な組織がオペラ制作を行っていることで、東京や神奈川に次ぐ公演回数となった。

オペラシアターこんにゃく座等の巡回型公演を実施する団体の公演は、従来から、当該地域のオペラ公演数に直接影響を及ぼすケースがみられる。2013年に宮城県が10位になった理由は、仙台オペラ協会が毎年行っている大規模な自主公演が2回、（公財）仙台市市民文化事業団等の主催で「慶長遣欧使節出帆400年記念事業」と題し、三善晃《遠い帆》公演が2回、平成25年度文化庁「地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」助成で行われたこと、《カルメン》が名取市で平成24年度文化庁「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」（共同制作公演）の枠組みで行われたことなどがあるが、大半はオペラシアターこんにゃく座、東京合唱協会、オペレッタ劇団ともしびによる移動公演である。

都道府県別公演数の増減に関して実感がわかないケースがあるのは、こうした子供向け鑑賞教室などはクローズドで行われる公演が少なくなく、広く地域に広報されないことに原因がある。表11を見ていただくとおわかりになるように、大規模公演が行われていない、あるいはほとんど行われていない県はかなりある。これらの県では、当該地域でのオペラ公演開催が、あたかも行われていないかのような錯覚に陥る。しかし、このように日本各地を移動しながら公演を行ういくつかの団体の活動のおかげで、オペラ公演空白県を免れるケースもあるのだ。実際に、2013年に高知県で唯一のオペラ公演を実施したのは、オペラシアターこんにゃく座だった。

表12の会場別総上演回数を見てみよう。大規模会場のうち、新国立劇場は、2010年から2012年まで全く変動することなく70回

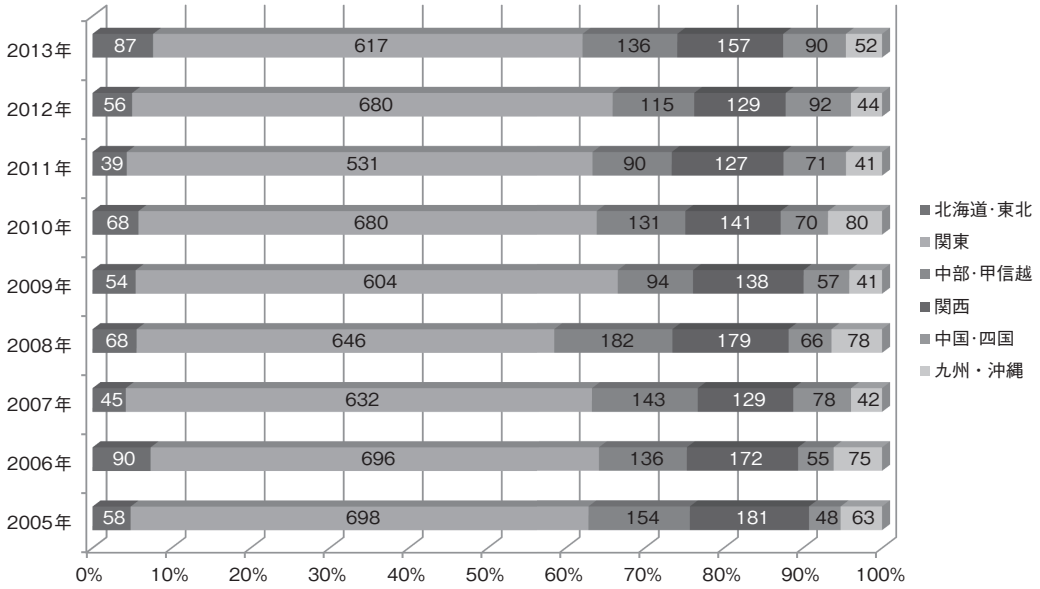
表10　2013年の都道府県別上演回数

No.	都道府県名	国内団体		教育研究団体		海外団体		合計		
		団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	上演回数順位
1	北海道	9	36	1	1	0	0	10	37	**8**
2	青森	3	5	0	0	0	0	3	5	29
3	岩手	4	6	0	0	1	1	5	7	23
4	宮城	7	23	1	1	1	1	9	25	**10**
5	秋田	3	7	0	0	0	0	3	7	23
6	山形	3	4	0	0	0	0	3	4	35
7	福島	1	2	0	0	0	0	1	2	43
8	茨城	3	13	0	0	1	1	4	14	17
9	栃木	4	5	0	0	0	0	4	5	29
10	群馬	3	4	0	0	0	0	3	4	35
11	埼玉	17	38	0	0	2	2	19	40	**7**
12	千葉	7	48	1	1	0	0	8	49	**4**
13	東京	106	365	7	20	8	41	121	426	**1**
14	神奈川	24	61	5	13	3	5	32	79	**2**
15	新潟	6	8	0	0	1	1	7	9	21
16	富山	1	1	0	0	2	2	3	3	41
17	石川	4	5	0	0	0	0	4	5	29
18	福井	0	0	0	0	0	0	—	—	—
19	山梨	2	6	0	0	0	0	2	6	26
20	長野	6	16	0	0	2	2	8	18	15
21	岐阜	4	7	0	0	0	0	4	7	23
22	静岡	7	13	2	5	2	2	11	20	13
23	愛知	16	56	4	7	5	5	25	68	**3**
24	三重	4	6	0	0	2	2	6	8	22
25	滋賀	7	19	0	0	2	2	9	21	11
26	京都	4	8	2	3	0	0	6	11	20
27	大阪	15	39	3	5	3	3	21	47	**5**
28	兵庫	17	38	2	4	3	3	22	45	**6**
29	奈良	4	19	0	0	1	2	5	21	11
30	和歌山	3	4	0	0	0	0	3	4	35
31	鳥取	3	4	0	0	0	0	3	4	35
32	島根	2	14	0	0	0	0	2	14	17
33	岡山	5	17	0	0	0	0	5	17	16
34	広島	8	33	0	0	1	1	9	34	**9**
35	山口	2	6	0	0	0	0	2	6	26
36	徳島	3	4	0	0	0	0	3	4	35
37	香川	3	5	0	0	0	0	3	5	29
38	愛媛	2	5	0	0	0	0	2	5	29
39	高知	1	1	0	0	0	0	1	1	44
40	福岡	6	17	0	0	3	3	9	20	13
41	佐賀	1	1	0	0	0	0	1	1	44
42	長崎	2	3	1	1	1	1	4	5	29
43	熊本	2	13	0	0	0	0	2	13	19
44	大分	5	5	0	0	1	1	6	6	26
45	宮崎	0	0	0	0	0	0	—	—	—
46	鹿児島	2	4	0	0	0	0	2	4	35
47	沖縄	1	2	1	1	0	0	2	3	41
合計	—	—	996	—	62	—	81	—	1139	—

表11　2013年の都道府県別・地域別総計

都道府県名	大規模会場		中・小規模会場		上演回数比率	地域
	団体数	上演回数	団体数	上演回数	総上演回数	
北海道	3	11	8	26	7.64%	北海道・東北
青森	1	2	2	3		
岩手	3	3	2	4		
宮城	6	9	3	16		
秋田	1	1	2	6		
山形	2	3	1	1		
福島	0	0	1	2		
地域合計	—	29	—	58	87	
茨城	4	9	1	5	54.17%	関東
栃木	3	4	1	1		
群馬	2	3	1	1		
埼玉	9	14	11	26		
千葉	4	10	5	39		
東京	50	194	77	232		
神奈川	18	37	18	42		
地域合計	—	271	—	346	617	
新潟	4	4	3	5	11.94%	中部・甲信越
富山	2	2	1	1		
石川	3	4	1	1		
福井	0	0	0	0		
山梨	0	0	2	6		
長野	5	13	4	5		
岐阜	1	1	4	6		
静岡	5	11	7	9		
愛知	15	21	12	47		
地域合計	—	56	—	80	136	
三重	5	7	1	1	13.78%	関西
滋賀	5	11	5	10		
京都	4	7	2	4		
大阪	14	27	11	20		
兵庫	11	24	12	21		
奈良	3	4	2	17		
和歌山	0	0	3	4		
地域合計	—	80	—	77	157	
鳥取	0	0	3	4	7.90%	中国・四国
島根	1	4	2	10		
岡山	2	4	4	13		
広島	7	12	5	22		
山口	0	0	2	6		
徳島	2	2	1	2		
香川	1	2	2	3		
愛媛	1	3	2	2		
高知	0	0	1	1		
地域合計	—	27	—	63	90	
福岡	7	12	3	8	4.57%	九州・沖縄
佐賀	1	1	0	0		
長崎	2	3	2	2		
熊本	2	4	1	9		
大分	4	4	2	2		
宮崎	0	0	0	0		
鹿児島	2	4	0	0		
沖縄	1	2	1	1		
地域合計	—	30	—	22	52	
合計	**—**	**493**	**—**	**646**	**1139**	**—**

図4　地域別総上演回数推移



だったのが、2013年には79回と増加した。東京文化会館は、2010年の34回から2011年の40回、そして2012年は41回、2013年には32回と2010年のレベルにまで減少している。兵庫県立芸術文化センターは2010年の17回から2011年の14回、そして2012年は13回となっていて、2013年は11回となった。

この他の公演会場としては、例年どおり、まつもと市民芸術館、愛知県芸術劇場、日生劇場、サンパール荒川、アステールプラザ、びわ湖ホール、神奈川県民ホールの名が挙がっている。さらに久しぶりにオーチャードホールの名前が復活した。《THE END》3回公演と、海外団体の招聘公演6回によるものである。

これらの会場には、各ホールによる自主制作公演の他、各地のオペラ団体が公演拠点として活用しているところもある。日本のオペラ公演やオペラ制作のかなりの割合が、こうした会場を中心に形づくられるようになってきた。

6. 演奏会形式など

この他、C表に分類された公演、すなわち演奏会形式・コンサート形式での上演の他、一部カットするなどで行われた公演にも目を向けてみたい。2013年には、こうした公演は390回を記録している。この中で大規模な会場で行われているものから、さらにいくつかの点で重要と考えられるものを整理して、複数とりあげてみよう。

まず、オーケストラが自らの定期公演などで、オペラ作品を取り上げる場合を挙げたい。全幕上演などではなく、しばしば抜粋で、さらにほとんどの機会で演奏会形式をとる。NHK交響楽団は、オペラ作品を自身の定期演奏会で取り上げてきているが、2013年にはヴェルディの《シモン・ボッカネグラ》を2回、チューリッヒ歌劇場などを中心に活動、オペラ指揮者として長いキャリアを誇るネルロ・サンティ指揮で行っている。この他、東京フィルハーモニー交響楽団がチョン・ミョンフン指揮によりワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》を3回公演したのだが、そのク

表12-1　2013年の会場別総上演回数（8回以上開催の大規模会場、［　］内は同一施設内の中・小規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	上演回数
1	東京都	新国立劇場オペラ劇場	61	2	0	63	79
		新国立劇場中劇場	13	3	0	16	
		新国立劇場小劇場（中・小規模）	0	0	0	0	
2	東京都	東京文化会館大ホール	13	0	19	32	32*
		東京文化会館小ホール	[2]	0	0	[2]	
3	兵庫県	兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール	8	0	0	8	11*
		兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール	1	2	0	3	
		兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院 小ホール	[3]	0	0	[3]	
4	長野県	まつもと市民芸術館主ホール	10	0	0	10	10
4	愛知県	愛知県芸術劇場大ホール	4	0	5	9	10
		愛知県芸術劇場コンサートホール	1	0	0	1	
6	東京都	Bunkamura オーチャードホール	3	0	6	9	9
7	東京都	日生劇場	8	0	0	8	8
7	東京都	サンパール荒川（荒川区民会館）大ホール	8	0	0	8	8
7	広島県	アステールプラザ大ホール	8	0	0	8	8*
		アステールプラザ多目的スタジオ	[6]	0	0	[6]	
7	滋賀県	びわ湖ホール大ホール	4	0	2	6	8
		びわ湖ホール中ホール	2	0	0	2	
		びわ湖ホール小ホール	[1]	0	0	[1]	
		びわ湖ホールリハーサル室（中・小規模）	[1]	0	0	[1]	
合計／総上演回数		—	144*	7	32	183*	183*/493

表12-2　2013年の会場別総上演回数（10回以上開催の中・小規模会場、［　］内は同一施設内の大規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	上演回数
1	東京都	町田市民フォーラムホール	16	0	0	16	16
合計／総上演回数		—	16	0	0	16	16/646

＊該当する規模の会場の上演回数を合計した。表12-1大規模会場の総上演回数には、中・小規模会場での上演回数は含まれていない。

オリティの高さが大いに評判になった公演だった。

日本では、ワーグナー・イヤーにしては、ワーグナー作品の全幕舞台上演の回数が少なかったのだが、演奏会形式では、上記の3団体の他にも複数の組織が公演していて、C表だけで18回を記録した。この中では、東京・春・音楽祭がセバスティアン・ヴァイグレ指揮のNHK交響楽団の演奏で《ニュルンベルクのマイスタージンガー》（全3幕）を演奏会形式、霧島国際音楽祭の祝祭管弦楽団が下野竜也指揮で《ワルキューレ》（抜粋・第1幕のみ）、九州交響楽団が大野和士指揮で《ワルキューレ》（抜粋・第1幕のみ）を演奏したことが特筆できる。さらに、新日本フィルハーモニー交響楽団と日本フィルフハーモニー交響楽団は同じ日にそれぞれの定期演奏会で同じくワーグナーの《ワルキューレ》（抜粋・第1幕のみ）をとりあげたことも、別の意味で話題になってしまったが、双方ともにレベルの高い演奏となった。

一方同じく記念年だったヴェルディは、多くの作品が演奏会形式等でも取り上げられ、C表だけで合計56回となった。その中には、チョン・ミョンフン指揮フェニーチェ歌劇場による《リゴレット》《椿姫》をフェスティ

バルホールこけら落とし公演として各演目1回ずつ、東京文化会館で各演目1回ずつの合計4回公演したケース、さらにグスターボ・ドゥダメル指揮でミラノ・スカラ座が《アイーダ》を演奏会形式で2回公演したケースなどが含まれ、海外団体による演奏会形式での公演として、挙げておきたい。ミラノ・スカラ座2回公演のうち1回はNHK音楽祭として、1回は大阪・フェスティバルホールのオープニング・シリーズの一環として行われた。その他にも、いずみホールが《シモン・ボッカネグラ》を自身のホールで行うなどの成果をあげている。

7. まとめ

東日本大震災が起こった2011年に総上演回数が激減したのだが、2012年は1,117回、2013年は総上演回数が1,139回となったことでさらにオペラ公演を取り巻く環境が好転したかのようである。これは、大小さまざまなオペラ団体の活動が多様に展開されたことにより国内団体のオペラ公演数が増加したことなどによる。

大規模な劇場型公演、あるいは東京二期会、藤原歌劇団といった規模の大きな公演を主催する組織による、団体型公演は継続して行われているが、東京二期会の総上演回数の一部は、団体と劇場の協働による大型公演によるものでもある。今後も、こうした劇場との連携が広がるのかどうか、我が国のオペラ制作の極めて大きな特徴であるオペラ団体主催公演の行方とあわせて見守りたい。

さらに、歌手等の集まりである小規模なオペラグループ等による中・小規模会場での公演が増加してきている様子も見て取れる。これは、全国にある音楽大学等で声楽やオペラを学んだ歌手達の発表の場が求められている証拠でもある。

2013年の数字を見ていると、オペラ団体や各地域の劇場での公演が比較的活発に、そして順調に行われているかのように見えるものの、東日本大震災の影響や、日本全体を長い間覆い包んできた厳しい経済状況の影響を受けていると感じられる現象は少なからずある。

まず、海外団体による公演回数である。下げ止まり傾向にあるとはいえ、一向にその数が2010年以前までの数字にまで戻る様相はない。2010年までに盛んに行われていた「巡回型」オペラ公演を、2013年に実施したのは3団体のみである。2012年のこの稿で、「招聘オペラ公演の減少が、明らかに東日本大震災を受けてのものであることと、その他にも「巡回型」オペラ公演を、各地域の公共ホール等が購入して実施するというビジネスモデルが、各地の現状と合致しなくなったと考えることもできるかもしれない」と書いた。

おそらくそれはかなりの部分で2013年にも当てはまると考えられるものの、「巡回型」招聘オペラ公演が一定数行われている現状も明らかにあって、そのニーズは引き続き各地であるものとも言える。それは、指定管理者制度の導入により、複数年度、そして長い期間にわたってのオペラ公演企画が劇場やホール側でしにくくなった一方で、「巡回型」招聘オペラ公演は毎年どこかの海外団体が必ず日本国中を公演して回るため、パッケージとして購入しやすいということもあるのかもしれない。いずれにせよ、海外団体の公演にも様々なものがあり、我が国のオペラ公演の多様性を彩る存在になっていることには変わりない。

また、総合芸術としてのオペラを上演する動きと並行して、「オペラ演出」を省いた公演が演奏会形式等で行われ、それが一方で大きな成果を挙げている現象も見逃せない。オーケストラが定期公演で取り上げたり、音楽祭のメイン行事として公演したりする状況

は毎年見られ、実際にそれらは芸術的な面でも重要になってきているのだ。オペラ演出の多様性が一層増していること、現代社会を反映しながら、受け止める側の観客にも理解しやすい演出を生み出すのが難しくなってきていることの証拠かもしれない。オペラ演出におけるこうした側面とオペラ作品の音楽的魅力とが、この傾向に拍車をかけてもいる。また、これに経済的な理由も加わるのだろう。

とはいえ、オペラの魅力は、その総合性にあることは間違いない。総合芸術としてのオペラの可能性を存分に活かせる人材が十分育っていくためには、どんな小さな公演であっても、若手歌手・指揮者・演出家・スタッフ等が活動しやすい環境が整えられていくことが求められている。